

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2013年 夏号 7月10日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

8年目の田んぼの学校、楽しくスタート

8年目を迎える田んぼの学校が5月26日(日)、農工大本町農場で始まりました。この日の開校式と田植えには、生徒42人、保護者43人、スタッフ26名など113名が参加しました。農工大学生グループ「耕地の会」の9名の皆さんがスタッフに加わり、若さあふれる楽しい田植えとなりました。なお、田んぼの学校は、府中かんきょう市民の会が、府中市から委託され、2005年から、国立大学法人東京農工大学のご協力により開催しています。



一列に並んで、田植え開始！

開校式・田植えに113名参加

今年の田んぼの学校には、54名が応募され抽選の結果45名となりました。小学1年生から65歳まで幅広い方が入学されましたが、7割が小学3年生以下です。

■9:00開校式 晴天の下、開校式が始まりました。冒頭、市民の会代表、農工大里先生、府中市環境政策課の加藤課長から挨拶がありました。このあと「稲の一年」と「田植えの仕方」の「授業」がありました。一本の苗が、10本以上の茎になり沢山のお米が出来る様子が、絵を使って説明されました。開校式の後、恒例のピョピヨさん(準備体操)を、参加者全員で元気に行いました。

■9:45田植え カエルのにぎやかな鳴き声が聞こえる中で、田植えが始まりました。スタッフの先導で、生徒たちは苗のかたまりを持って、おそるおそる田んぼに足を踏み入れました。多くの保護者の皆さんも、子ども達と一緒に田んぼに入りました。「ヌルヌルだ！気持ち悪い」などの声が聞こえましたが、すぐになれて苗を一本ずつ、ひもの目印にそって植えていきました。新潟で援農されている農工大「耕地の会」の学生スタッフの皆さんのテキパキとした指導もあり、田植えは予定より早く30分程度で終わりました。泥に汚れた手足の洗い場も、農工大に提供していただきました。

親子で仲良く泥んこ田植え体験

■10:30ふりかえり 参加者全員が再集合し、田植えをふりかえりました。生徒、保護者からは、真っ直ぐ植えるのが難しかった。・子どもが楽しんでいる姿が見えて良かった。・人生初めての田植えは楽しかった。・子ども達から元気をもらった、などの感想が寄せられました。スタッフからは、今年は日曜日に開催したため、学校行事と重ならなかったため、欠席者が例年に比べ非常に少なく良かった等の意見が出されました。

■10:40バケツ稲 バケツ稲の植え方、観察記録の書き方の質疑がありました。苗、土、肥料を各自が家に持ち帰りバケツ稲を植え、生育の様子を記録、後日発表するなどの説明がありました。バケツ稲の観察は任意ですが、ほとんどの生徒が持ち帰りました。なお、スタッフも、本町農場内でバケツ稲を育て観察します。

■11:10終了 最後にアンケートを配布回収し、第2回の学校の簡単な紹介を行い、第1回プログラムは終わりました。終了後も、多くの親子が、農場に残り、田んぼの動植物を仲良く観察する姿が目立ちました。



若さあふれる「耕地の会」の皆さん

■「田んぼの学校」の今後のスケジュール

- ・7月 6日 稲の生育観察、草取り、生き物さがし
- ・9月28日 稲刈り、ハサかけ もみのつき方観察
- ・10月12日 脱穀、もみすり 玄米の出来るまでの作業
- ・11月17日 収穫祭・修了式 参加者交流、記録上映

(村崎啓二、渡辺 實)

府中のレンゲが消えゆくなか

レンゲは桜とともに日本の春をいろどる草花です。かつて府中をはじめ多摩川流域の低地には、田んぼが広がり、農閑期の田んぼに播いたレンゲが有機肥料として活用され、春には一面に鮮やかなピンク色の花が咲く「のどかな風景」が見られました。

しかし宅地化が進み、田んぼも消えつつあります。「府中かんきょう市民の会」は「レンゲまつり」を通して、農地や都市農業の大切さを多くの方々に知っていただき、田んぼのある環境を守っていきたく願っています。



賑やかに600人が集う

今年のレンゲまつりは、例年のように押立町1丁目の戸塚勇さんの田んぼをお借りして開催されました。

4月27日(土)は好天に恵まれ、近くの押立保育園の園児や周辺の4つの学童保育の子どもたちも参加して、およそ600名ぐらいが来場し、大変賑やかなまつりになりました。

花飾り遊びは、いつもいちばん人気のある遊びです。今回は日除けテントをつくる時間もないほど、早くから親子連れが集まり、やっと集めた花がしおれてしまい、結局は花束を作ることになりました。シャボン玉遊びや草笛作りも、人が途切れることはありませんでした。わら細工作りでは、懸命に「わら草履」やペットボトルを入れる「わらの網」を作っている子ども達が見られました。昨年からはまった「コマ作り」は、会員のアイデアでリサイクルセンターに出された家具の足を1センチ幅に輪切りにして利用しています。

子ども達はコマの表面に絵を描いて、一生懸命回そうとします。何回も練習しているうちに、やっと回せるようになり、それが面白くて、もう1個作ったりと、150個用意したコマの材料は午前中にはなくなっていました。

紙芝居や「エプロンシアター」には保育園児がたくさん集まり、一緒に「不思議なポケット」の歌を楽しそうに歌っていました。蜂蜜や野菜も順調に完売です。

写真展示「農ある風景」は、いつまでも残しておきたい府中の農業の状況を伝えていました。また、東日本大震災の写真展示もあわせて行ないました。

2002年のレンゲマップには、市内9箇所と国立・三鷹の各1所のレンゲ田が紹介されています。今年のレンゲマップでは、四谷の2箇所と押立町のレンゲまつり会場の計3箇所しか紹介できませんでした。

農家の高齢化や後継者不足などで田んぼも畑も減少しているからです。当会は、農家を支援する「援農活動」で農作業をお手伝いして農地の減少に少しでも歯止めをかけようと努力していますが、私達だけの力で解決できる問題ではありません。「府中市内から農地がなくなってもいいのか…」。多くの市民に考えていただきたいと思っています。(梅沢みどり)

マスコミ報道で思わぬ反響

レンゲまつりを成功に導く広報活動は毎年1月頃から広報スケジュールに従い行います。

まず、チラシ作成に先立ち、開催日やイベントの内容を確定し、デザイナーに発注します。チラシ印刷前に、市の後援を得ているので市のチェックを受け、3月下旬までに配布先と配布部数並びに配布分担を決め、印刷を行います。今回は約4,000枚を印刷し、市の施設をはじめ、近隣の小学校、団地、マンションなど30箇所に配布。特に団地、マンションは10人で約3,000戸にポスティングしました。

13回目のレンゲまつり開く



第2回レンゲまつりは見事に咲いた（押立の田んぼ 2002年）

4月の上旬に朝日、読売、毎日の各新聞社に記事の掲載を依頼。その結果、レンゲまつり前日の4月26日朝刊各紙に掲載され、『朝日』は写真付でした。

その結果、朝7時頃から夜の9時頃まで、電話が鳴り止まず、レンゲまつりの当日だけでなく、10日後の5月5日まで続きました。回数も約150回以上で、担当したわが家では食事も落ち着いてできない有様でした。

問合せは、開催場所やアクセスを知りたい市外からの人たちで、西東京、八王子、東村山、立川、国分寺、小平、三鷹、武蔵野、稲城など13市にもおよび、小平市民からの問合せが最も多くありました。ほとんどが『朝日』を見たといい、写真入り掲載が目についたようです。当日は約600名の参加があり、マスコミの影響力を改めて思い知らされました。

年齢層から判断して60歳以上の女性が多く、レンゲの花の懐かしさや子供の頃の思い出話、中には、亡くなった母親がレンゲの花が大好きだったので、仏壇に供えたのでレンゲの花を少し別けて欲しいなどもありました。

（レンゲまつり広報担当 竹内 章）



悪戦苦闘のレンゲ栽培

2001年からのレンゲまつりも13回目。その間、レンゲがよく咲いたのは3回ほどで、特に2008年以降は不作が続いています。今年のレンゲ花は田んぼの1割程度と、残念な結果に終わりました。

レンゲまつりは毎年大勢の方々に楽しんでもらっていますが、主役のレンゲの開花がこのような有様ではまつりの盛り上がりも半減します。

レンゲの作柄に影響する要因は、天候不順や害虫の発生、あるいは田んぼの水はけなど沢山あります。それらを総合的に考えた対応が求められます。今年は四谷のレンゲはよく咲いていました。「押立はなぜうまくいかないのか！」栽培担当として力不足を痛感しています。

<土壌水分の問題>

レンゲの種子は1週間程水に浸かると発芽力がなくなるか、発芽しても芽がくさってしまうようです。逆に種をまいたあと土壌が乾燥しても発芽しません。当該地では、年によってそのどちらかになることが多く、発芽はお天気任せでした。その後、田んぼの持ち主の戸塚さんのご意見で、稲刈りのあと耕運し水はけを良くして播種するようにし、土壌水分の問題はほぼ解決しました。播種後にレーキで薄く土をかけることで、さらに発芽がよくなることも分かりました。

<アルファルファタコゾウムシ>

一時猛威をふるったタコゾウムシも若干下火になってきました。5月の連休の後、レンゲの枝葉にできた繭をバーナーで焼いたり、畦に段ボールを敷きつめ、成虫を捕まえたり、殺虫剤をまいたりしましたが、完全防除はできていません。

<雑草の繁茂>

昨年の秋に播種したレンゲは非常によく発芽し、今回こそはと期待をしました。しかし春先になるとセトガヤ、ナズナ、キツネアザミなどが猛繁殖、レンゲが消えてしまいました。レンゲの栽培が盛んな岐阜県の農業技術センターに相談したところ、レンゲは雑草に負けないが、根瘤菌が少なくなりレンゲが弱っていると考えられるとのことでした。

今秋は考えられる対策を十分検討して取り組み、今回が私のレンゲ栽培との最後の関わりにならないようにしたいと思います。（野口道夫）

新人紹介 コーナー

「府中かんきょう市民の会」へようこそ！

渡部敏郎さん

竹村勝代さん



2013年4月10日の定例会
渡部さんは左側の左端から3人目

「府中かんきょう塾2011」卒業後に入会

一昨年の環境塾で「環境」を学んだ後、府中に移り住んで30年、何か府中市に関わることをしたいと思い、昨年初夏に入会しましたが、最初の例会に出席した直後に体調を崩して8月～9月の1か月余は入院でした。従いましてその後の体調維持を考慮して、会での活動はテーマ内容と頻度を勘案し少しセーブした形で参加しています。皆様にはあるいはご迷惑をお掛けしていることと拝察します。

この会での活動以外に、6年前から三井ボランティアネットワークに参加して、東京都の水資源保護のための奥多摩で植林活動や狛江付近の多摩川や東大島付近の荒川河川敷の清掃活動に関わっております。

市村農園への援農とレンゲまつりに参加

当会の活動としては、昨年12月より市村農園への援農に参加しています。腰を屈めての作業が多いので少し辛いものがありますが、作業中や作業後の市村さんを囲んでの話は日本農業の縮図としてなかなか興味深いものを感じています。

農協の機能と効率とか専業農家と兼業農家の扱い、自給率40%台でありながら、耕作放棄地であっても田畑を持ち続ける農家等々、農作業を通して日本の農業を大変歪めてしまっている現状を考えさせられる一日でもあります。

4月のレンゲまつりでは蜂蜜の販売を担当しましたが、かなりの人が開場の早い時間にレンゲ目当てでなく、蜂蜜を多数買い求めていたのは驚きでした。

- ①蜂蜜は砂糖の約6分の5くらいのカロリーであり、同じ甘味料でも、砂糖よりも太りにくい。
- ②亜鉛を除く主要なミネラルの殆どを含むのを事前に記憶しておいたので、何人かの人にはこのことを効用としてお話ししました。少しは生活の知恵としてお役に立てたかも知れません。

みなさまの熱心な活動と研究心に感心

2012年10月に「府中かんきょう市民の会」に入会して以来、みなさまの熱心な活動と研究心に感心いたしております。

楽しい野鳥観察会に参加したり、ハケから湧きだす水の流れに沿いながら野の草木やいきものを見つけては、この会の大切さを思います。

図書館資料を活用しませんか？

すでに「府中市環境保全活動センター」内には環境学習の資料がありますが、より幅広い資料が案外身近にあります。特に視聴覚資料は自然科学の分野で有効なメディアと考えます。

まず、府中市中央図書館4Fにある視聴覚資料は年々充実しており大いに活用する価値があります。環境分野は自然科学の分類にあります。

ちなみに、■ナショナルジオグラフィックシリーズの生物・文化人類学・宇宙地学もの■イギリスBBC系の科学番組類■NHKスペシャルの科学番組シリーズも多数所蔵しています。

もちろん書籍、雑誌もあり、グループ研究室も申し込めば利用できます。大賀博士寄贈による文庫の文献目録は労作で、宮本常一の蔵書も多数所蔵されています。

農工大図書館は一般人も研究目的なら利用でき、さすがに自然科学分野は強い。2013年版の図書館ガイドがネットで閲覧できます。

ほかに東京都緑と水の市民カレッジ「みどりの図書館」は美しい日比谷公園内にあり、自由閲覧で一日ゆったり過ごせますよ。ただし視聴覚資料は少ない。各機関ともオンライン蔵書検索が横断でき、デジタルアーカイブもあります。

最後に、公の図書館を活用してみなさんとセッションできる場はないかしらと思っています。



あずまやでの巣箱の組み立て作業。右が竹村さん

武蔵野の面影を訪ねて

日立中央研究所庭園特別見学会

日 時 5月15日(水)

天 候 快晴

参加者 約70人

時 間 13:20~14:50

日立中央研究所庭園特別見学会終了後、都立
 殿ヶ谷戸庭園見学会も実施されたが、紙面の都
 合上報告文は表題とする。

主 催 環境保全活動センター(環境政策課内)



喧騒を離れた、日立中央研究所庭園正門前にて

快晴で強風の日だった。JR国分寺駅南口に13:00に集合し、環境保全活動センター職員とお手伝いのボランティア共々日立中央研究所庭園にむかった。庭園にはいると、環境保全活動センター職員から、40人募集のところ150人応募のため急きょ定員を70人に増やした旨の説明があった。ここは、知る人ぞ知る人気のスポットである。

喧騒をはなれた庭園は穏やかな光景だった。コナラ、クヌギ、ケヤキ、サクラ、サワラなどの大木が防風林の役目を果たし、強風で難儀したのは嘘のようだ。上空に目をやると樹木のでっぺんが大きく揺れ、その隙間から木漏れ陽がさしている。樹高は40mぐらいだろうか？ 陸橋を渡り左に曲がると中央研究所本部が現れ、さらに林のなかを突き進むと、前方には整然としたモウソウチクの竹林が視界にはいつてくる。竹林は手入れが行き届き、密生していないので意外に明るい。

間もなく、野川源流の一つとされる「大池」につく。大池は構内のハケから流れ出る湧水を集めて作られた池である

が、そこには白鳥・マガモなどが群れ、林に群れるものを加えると40種を超える野鳥のオアシスとなっている。また、池の外周は様々な樹木と草花で覆われていた。「目に青葉山ほととぎす 初鯉」の季節となり、一年中でもっとも緑が映える季節だ。その瑞瑞しい緑は、いまが一番強い芳香を放ち、春の大観を知覚できる。

大池から少し離れた湧水を眺めに行くと、そこからはわずかな水が流れてでいた。昔、北アルプスの黒部川源流を訪ねたときも、奥秩父の多摩川源流を訪ねたときも、大河の源流は土中からの一滴だった。大池から塀のむこう側の西武国分寺線とJR中央線の鉄道をくぐった水は、野川として約19キロの旅をし、やがて多摩川に吸収される。

大池の前で研究所職員から庭園の説明をうけ、そこからは市の職員と同行していた森林インストラクター氏の出席である。絨毯のようにやわらかい小径を進み、インストラクターから様々な樹木の説明とそれに関わるこぼれ話等を聞いた。構内には約120種2万7千本の樹木が生い茂っている。メタセコイア(別名 アケボノスギ)が「生きている化石」とは初めて知った。府中で時々見かけていたのでごく普通の樹木と思っていたが、かなり珍しい植物のようだ。

明治の児・国木田独歩は「山林に自由存す」と高らかにうたった。山林を彷徨していると様々な虚栄がはがれていく。それは、現代人にも「山林(自由)か虚栄か」と問いかけているようだ。



瑞瑞しい緑に囲まれた野川源流の「大池」

人々の手が入った明るい落葉広葉樹林帯である雑木林。あるいは、里山の生活圏と自然とが入り混じった田園地帯としての武蔵野。こうした懐かしい原風景が失われて久しいが、ここには武蔵野の面影が残っている。

(葛西利武)

原発事故被災地福島を訪ねて

4月15日、16日「けやき平和コンサートの会」主催の研修ツアーで福島に行ってきました。ふくしま復興共同センターにチャリティコンサートでの義援金を持って、又福島の実状を知ろうと42名で参加しました。受け入れ窓口として福島県農民連の会長の亀田さん、事務局長の根本さんが努力されて企画して下さいました。先ず飯舘村の仮の役場を訪れ、府中市の高野市長よりのメッセージをコンサートの本間会長より菅野村長に、また千羽鶴とカンパも手渡しました。そして村長さんより実状をお聞きしました。



府中市の高野市長よりのメッセージを読み上げる

地震、津波災害に加え放射能による目に見えない被害と、長い間世代を超えて不安を抱えながら戦って行かなくてはならず、具体的な様子などを話されました。仮役場の狭い所で、廊下でも仕事をしている様子などを見て大変だと思いました。みんなで「花は咲く」を歌い、仮役場を後にしました。そのあと昼間だけ入れる地区をバスで通りましたが進むにつれてどんどん放射線量が高くなってい

ます。空き家や、荒れた畑、あちこちに除染した廃棄物が積んであり、2年経った今も水が引かない土地もかなりあります。

飯舘村を通過して小高地区に行きました。いまだに住めない自宅を会長の亀田さん自身が案内してくれました。バスを降り、家の前に行くと入口の表札には6人の家族の名前があり、玄関のカギを開けると大きな時計がカチカチと時を刻んでいました。今でも住んでいるかのようです。屋根いっばいに太陽光発電のパネルが並んでいました。樋の下に計測機を置くといきなり針が13.7を示しました。

広々とした庭には可憐なスイセンやしだれ桜など咲き乱れていますが小高全体が故郷を離れなくてはならなかったことを思うとつらくなります。夜には学習会が開かれ、根本さんがスライドで現在の状況を大変解りやすく説明して下さいました。大変、有意義な研修旅行でした。(勝谷寛子)



被災時のまま放置されている車

後世に残そう ハケと湧水！ 西府崖線 保全活動記

(1) 第4回清掃活動

日時 5月12日(日) 集合9:45 清掃10:00～11:00
茶話会11:00～11:30
参加者 会員9人と近隣住民1人 計10人
※近隣住民の方は、西府わき水周辺を定期的に清掃している。

天候 晴
ごみ量 燃えるごみ5袋 燃えないごみ6袋 その他

<参加者の一言>

- ・清掃時、西府崖線(ハケ上下、わき水、市川緑道等)を200人のウォークフェスタ参加者が来るので、事前に「西府崖線保全活動No.7」ピラを出発点の郷土の森博物館で参加者に配布してもらおう。作業中、ウォークフェスタ参加者の方々と挨拶を交わす。
- ・ウグイスの音がとても気持ちよい。ハケを清掃しているのでウグイスも気に入って来てくれるのだろうか……と勝手に

に思う。

- ・ウォークフェスタの参加者に、樹木のネームプレート取付けを絶賛される。
- ・ゴミは以前より減っている。定期清掃の効果だろうか。
- ・父子ずれ3人が市川用水でザリガニ釣りに興じている。バケツをのぞいたら5匹ほどいた。
- ・わき水周辺のネームプレート2枚が破損していたので、新たに取付ける。

(2) 第3回樹木ネームプレート取付け作業

時間 11:45～12:30 ※日程、天候共に上記に同じ
参加者 上記会員9人に、森林インストラクター(会員)も加わる。計10人
場所 本宿町緑地 ※鎌倉街道本宿トンネル南口の東側たんぼ教会前
取付け樹木 イロハモミジ ハリエンジュ(ニセアカシヤ) アカマツ ヤマグワ サワラ ケヤキ イヌザクラ ムクノキ(2本) 計9本
※1回～3回の合計は74本(30科)

(葛西利武)

河原に咲く花の観察会

5月19日(日)。晴、気温23度で微風と良い天気恵まれたが、観察会が広報掲載された頃、5月19日は雨模様と予報が出ていたためか申込みが少なく、参加者は一般市民11名、市民の会7名の合計18名だった。

講師は例年通り東京農工大の星野先生にお願いした。中河原公園で観察会に先立ち、先生はこの日の観察会の概要と、多摩川の植物の生態について、河原に生える植物の種類は陸部のそれと異なり流動的で水の流れが変わったり新しい裸地が出来ると生育する植物も変わることや、上流から流れつく木の実や草の種子が発芽・生育して、それまでと別の植物が繁殖することがあると話された。

河原に降りて、最初に目に入ったオオキンケイギクやコゴメバトギリなどを解説しながら辺りを見回し、「やはり外来種が増えてますね」と先生の呟くような小さい声が聞かれた。関戸橋をくぐり川辺に出ると、ケキツネノボタン、ユウゲショウ、アレチハナガサと観察する草花は枚挙にいとまがない。

今度は参加者が「これは何ですか？」と花を差し出して質問すると、先生は“植物リスト”を見ながら「37番、セリバヒエンソウ」と番号、種名を言って説明をはじめられる。

ここで“植物リスト”について触れておこう。この観察会も年々進化している。今年の観察会ではこのリストが大いに役立った。観察に入る前に『河原に咲く花の観察会植物リスト』を先生と参加者に配布して、いわばこれを辞書のように使った。リストにはカタカナの種名に番号がついている。

先生が56番の「ミゾコウジュです」と言えば、皆はたとえそれが聞き慣れない花の名前でも、あわてることなく番号で「ミゾコウジュ」と正しい種名を確認し、あとは先生の説明にじっと耳を傾け、その花のことを十分に理解することが出来たのである。さらにもう一つのリストの効用として、例年より30%も多い実に88種類の花を観察することが出来た。



ムラサキツメクサ



ハナウド

川辺から上がり、野球広場でセイウタンポポの説明が始まったとき、ふと10年前のある出来事を思い出した。西日本出身の私は子供の頃、道端や田の畔で見っていたのはすべて白いタンポポ(シロバナタンポポ)で、タンポポは白い花だと信じていた。それから50年後、多摩川の草花観察会で生まれて初めて黄色いタンポポを見たときは少なからぬ衝撃を受けた。しかも我が国では白より黄色が多いという。“井の中の蛙大海を知らず”である。これを機に、草花音痴の私は月1回の観察会に参加することにした。

野球場の大きなクルミの木の下で一休み、涼を取りながらお茶を飲みしばし談笑。

この観察会のハイライトはやはりレンリソウだ。ここ数年の市民による地道な保全活動の効果が徐々に現れ、今年は3年前の約4倍の150株余りが開花。全員がロープ柵の外から紅紫色の可憐な花に見入る。「沢山咲きましたね」「可愛い花だよ」などの声が聞かれ、花に近づいてカメラにおさめる人も。

数日前に草が刈り取られた土手を上がって“かぜの道”にでると爽やかな風が頬をなでる。

郷土の森の垣根の下で星野先生から「今見てきたように多摩川では四季折々いろんな花が観察できます。時間を作ってきてください」と、結びの挨拶があり観察会を終えた。

(佐伯郁男)





太陽光発電との 連携運用で

電気自動車(EV) に乗り換えた

ライフスタイルの見直し

昔の思い出「ボワーン、ボンボン、ボワーンキュキュッ」の爆音とダッシュ。信号が変わると出足よく次の信号まで一着ゴール…若いときに憧れたあの行動は何だったんだ。街中を走るには速度制限内で快適なドライブとなった昨今。普通車も要らない、『軽』でも地球環境に優しい車で自然エネルギーである太陽光発電との連携を考えてみたいと電気自動車(EV)に踏み切った。

太陽光発電の設置

住まいの建て替え時に、自然エネルギー活用の補助金制度を利用し個人レベルでのCO2抑制策を考えた。「太陽光発電で、設置費用の回収はできませんよ！」と住宅メーカーから言われた。

設置して10数年、毎朝、出力調整器を操作して前日の発電量を測定・記帳するのが日課となった。1.7KWの小規模ながら設置以来、4000KWを超えた。太陽光発電(直流)を蓄え、家庭で利用(交流)するには蓄電・変換などの設備投資が必要だが、この設備投資を家庭に電気が送られる電力会社の「配電線」と考え、設置を決めた。

太陽光発電とEV車との連携

既設の太陽光発電で余った電力(発電)は電力会社へ売電(別契約)し、夜間にEV車を充電する。つまり自然エネルギーを電力会社の巨大な蓄電網に蓄え、必要な時に電気製品と同様に電気を取り出す。しかも昼間の電力需要ピーク時にはガソリンを使わないクルマとして動き、また夜間の余剰電力を「充電」に活用することで、電力消費の平準化にも貢献している事になる。さらに変換器を利用すれば、EV車を場所選ばない電源として停電対策にも利用することもできる。太陽光発電とEV車を組合せすることでカーライフを楽しめる。

地球温暖化・環境汚染防止

「年間約100トンのCO2を削減は、軽ガソリン車と比較し、年間走行距離1万kmの場合、樹齢50年の杉の木76本が年間に吸収するCO2に相当する。発電時を含めてもCO2

は約70%削減」

「大気汚染の原因となるNOX(窒素酸化物)やPM(粒子状物質)を一切発生しないので、地球にも人にも優しい」はメーカーの宣伝文句だが、EV車充電を太陽光発電で行うので発電時のCO2も出さないと自負している。

EV車でエコドライブの見直しを

従来のガソリン車運転はエコを考慮した運転になっているだろうか…?と言う疑問にも答えてくれる。“エコ運転評価センサー”がカーナビに組み込まれ、ガソリン車から乗換えた時は評価点50%以下だったが今は70%以上となった。理由は信号待ちスタート加速、信号ストップの繰返しはエコドライブとは言えないからだ。エコ運転の評価が数値で示されるのも楽しいものだ。購入した車は、『軽』のため登坂や積載などの心配もあった。定格出力25.0KWといっても性能は判り難いが、加速性・乗り心地、走行実績:10KW, 100km(メーカー仕様10.5KW, 120km)から、ともに「ガソリン車に勝る」と評価。

EV車の魅力

さらにブレーキ操作・下り坂では蓄電もできる回生制動。つまり走りながら走行距離も伸ばせる特徴もあり、エコ運転の醍醐味を味わえる。これもEV車に魅せられた要因のひとつだ。またEV車導入を機に、生活面でも節電、電力消費の平準化など意識が向上した。

充電は一般家庭コンセント(100V、200V)15Aから可能だが、遠距離運転には充電ターミナル(急速充電)のインフラ整備も今後期待したい。(田上昌宣)

